

忍術指南

野村胡堂

一

「八、身体が暇ひまかい」

銭形平次は、フラリと来たガラッ八の八五郎をつかまえました。
「有難いことに、あつしが乗出すような気の利いた事件ことは一つもねえ」

「大きな事を言やがる」

二人は相変らずの調子で話を始めました。

「いったい何をやらかしや宜いんで、親分」

「左内坂に忍術指南の看板を出した浪人者があるというじやないか」

「聴きましたよ、成瀬なるせ九十郎とか言ってる」

「その道場へ、これから入門しようと言うのだ」

「へエー、親分がね、へエー、忍術の稽古けいこに」

ガラッ八は滅法キナ臭い顔をして見せます。

「忍術も武芸のうちだというから、教えて悪いことではあるまいが、泰平の世の中に『忍術指南』の看板を出すのは何となく穩おだやかじゃねエ。それに忍術というものは、甲賀組こうがとか伊賀組いがとかが公儀から預って、町人や百姓には稽古をさせるものじゃねえと思ってるが、——左内坂のは甲賀流でも伊賀流でもなくて、霞流かすみりゅうとか言うんだってね」

「へエー」

「御奉行所でもひどく心配なすって、万一謀反むほんの企くわだてでもあつて

は一大事だから、中へ入って捜^{さぐ}るようにという申付けだ」

「へエ——」

「これから市ガ谷左内坂まで行つて、成瀬九十郎の門人になろうと言うのだよ、お前も附き合つて見ちゃどうだ」

「そいつを稽古しておいたら、晦^み日^そに借金取が来たときなんか、恐ろしく調法だろうね、親分」

「馬鹿な事を言やがれ」

無駄を言いながら二人は市ガ谷左内坂に向いました。

ある秋の日の夕景、山の手の街は、もう赤蜻蛉^{あかとんぼ}がスイスイと頭の上を飛ぶ時分のことです。

成瀬九十郎の道場は——いや、道場と名のつくようなものではありませんが、表に出した真新しい看板の『霞流忍術指南』の六文字だけが目立つ程度の、至って貧弱なしもたやでした。

「御免」

声のでっかいガラッ八が、精いっぱい威儀^{いぎ}を作つて訪^{おも}なうと、町内中の新漬^{しんづけ}の味にひびくようなダミ声で、ドーレと来るべき筈の段取を、どう間違えたか、

「ハイ」

優しい声がして、格子と中の障子を、たしなみ深く開けたのは、十八九の淋しい娘です。

神田の次平、五郎八と名乗つて、忍術執心^{しゅうしん}のことを申入れると、
「しばらくお待ちを」

娘は一たん奥へ引込みましたが、やがて改めて二人を案内します。
す。

「神田の次平、五郎八と言うのか。本来ならば町人に忍術は無用

のものが、まだ一人も弟子がつかないから、大負けに門弟にしてやる。さア、ズーッと此方へ通るが宜い」

おそろしく口の達者な四十男が、畳を剥いで、床板だけ敷き直した十畳敷ほどの道場に二人を通しました。

娘の淋しく美しいに似ず、これはまた何んと言う馬鹿馬鹿しい忍術の先生でしょう。背は低い方、肉附も極度に節約して骨と皮ばかり、顔は皺だらけのくせに、眼と口だけが人並以上で、わけでも爛々たる眼には、人を茶にしたような、虚無的な光さえ宿っているのです。

「有難うござります、何分よろしくお願い申します」

平次は用意の束脩を二人分、お盆を借りて差出し、その日は四方八方の話だけで帰りました。戸口を出るともう、

「親分、変な野郎じゃありませんか」

ガラッ八の八五郎には、腑に落ちない事だらけです。

「何が変なんだ」

「天下をひと呑みにするような大きな事ばかり言やがる癖に、人間を見ると、沢庵になり損ねた干大根見たいな野郎で――」

「だが、一と癖ありそうだな。俺は馬鹿にして行っただが、逢って見て考え直したよ」

「ヘエ――、そんなもんですかね、――尤もあの娘は満更じゃねえが」

「娘の鑑定だけは、大した腕前だな、八」

「それ程でもねえ」

稽古日は三の日と、八の日。教えることは他愛もありませんが、この成瀬九十郎という人物から、平次は不思議な力と情熱を感じ

て居りました。

三度目の稽古日、忍術に関するいろいろの口伝くでんや理論を聞いて、小さい課程の幾つかを済ませた後、別室に退いて、娘に茶を入れさせながらの話です。

「少し話して行くが宜い。次平は生れながらの忍術使いだ、二三年みっちりやると、うまくなるぞ」

成瀬九十郎はそんな事を言って、大満悦です。

「あつしは、先生？」

ガラッ八は側から鼻を出しました。

「五郎八は駄目だ」

「へエ——？」

「生れながらの鈍根どんこんだな、お前は」

「へエ」

まるつきり型無しです。

「ところで先生」

平次は静かに切出しました。

「何じゃな、次平」

「近ごろ御府内を騒がしている山脇玄内やまわきげんないとか言う泥棒、あれはやはり忍術の心得があるのでしょいうな」

「心得どころではない、忍術名誉の達人だな。南北両奉行の役人が、齒ぎしりしたところで、山脇玄内を縛ることなどは思いもよらない」

「それほど心得のある者が、押込夜盗の真似をするとは憎いじゃございませんか」

「いや、これにも仔細しさいのあることだろう。例えば、山脇玄内は義

賊と言った輩ともがらかも知れぬではないか」

成瀬九十郎はケロリとしてこんな事を言うのです。

「その義賊というのを、あつしは大嫌いなんです。貧の盗みは百文盗っても世間は許しやしません、義賊と名が付くと、百両盗って十両か二十両だけ貧乏人にやり、あとは自分の贅沢に費つても、世間じゃ見上げたもののように言い囃はやします。あつしはそれが気に入らないんで」

「たいそうな意気込だな、次平」

成瀬九十郎は強しいても争あらそわず、ただニヤリニヤリと笑っているだけです。

二

山脇玄内の跳梁ちようりようはそれからまた一段と目ざましくなりました。

襲われるのは大抵高家大名、でなければ大町人で、盗られる金も百両、二百両と纏まとまった口ばかり。それを貧乏人にバラ撒まくのが山脇玄内の道楽らしく、玄内の活躍が激しくなればなるほど、心なき江戸っ子は喝采かつさいを送るのです。

中には、不義の富を積んでいる者を襲って、有金を奪い取り、それを正統せいとうの持主に還して溜飲りゆういんを下げたりすることもありました。が、どんな弁解があるにしても、山脇玄内が泥棒を働いていることには何の変りもありません。

それから二三日経ったある晩、山脇玄内の増長は羽目を外して、市ガ谷の尾州家上屋敷に忍び込み、その金蔵に潜り込んで、千両箱を二つまで盗み出したのです。

六十一万石の大々名、御三家随一の名家でも、これは捨て置くわけに行きません。当面の責任者御蔵番奥宮鏡太郎は、用人玉垣三郎兵衛に伴われて神田の平次を訪ねて来ました。

「昨夜酉刻から戌刻までのあいだ、御門の締まる前後、詳しく言えば御蔵の戸前に錠をおろす前後の、ほんの一寸した隙にやられた。――盗られた金は二千両だが、これが出て来なければ、役向不取締で、この奥宮鏡太郎腹でも切らさばなるまい。拙者が腹を切れば、下役二人も生きてはいまい、その女房子供も路頭に迷うことであろう。言わば人間の命幾つにも及ぶ事件、何とかなるまいかの、平次殿」

奥宮鏡太郎、畳の上に手を突き、分別盛の額を埋めての懇願です。

「お大名方御屋敷に起ったことは、町方の者ではどうにもなりません、自由にお屋敷の中へ入れて下されば、何とか工夫をして見ましょう」

平次もツイ相手の真剣さに引入られます。

「それは易いことじゃ、お屋敷へ自由に出入りのことは拙者が引受けよう」

そう言ってくれるのは、用人玉垣三郎兵衛、これでどうやらこうやら段取りだけは出来ました。

「それではお供いたします」

市ガ谷の尾州邸へ出かけて行った平次は、奥宮鏡太郎の案内で、内外隈なく見廻りましたが、捕物の名人と謳われた銭形平次の慧眼でも、何の証拠も掴むことは出来なかったのです。

堀も高く見張りも厳重で、容易のことでは外から忍べそうもあ

りませんが、屋敷の中には、まさか二千両の大金を持出すような不心得者がある筈はなく、それに金蔵の扉も土台も無事で、引つ掻きほどの傷もついていないところなど、近頃御府内を騒がしている、山脇玄内の手口でなければなりません。

「暫らく考えさせて下さい」

さすがの平次も、そうでも言つて引下がる外は無かつたのです。相手が山脇玄内だとすると、これは容易ならぬ事になります。物を考えるともなく、平次の足癖は、そこからあまり遠くない、左内坂の成瀬九十郎のところを訪ねました。

「これは、次平ではないか、今日は稽古日ではないようだが」

成瀬九十郎は少し臍に落ち兼ねた顔です。

「この辺を通つた序と申しちゃ失礼ですが、ちよつとお邪魔をいたしました」

「邪魔どころか、退屈で困っている。ゆるゆると話して行くが宜い、——ところで大層顔色がよくないようだが、何か心配事でもあるのかな」

「心配事なんかございません、——尾張様のお屋敷へ泥棒が入つた相で、世の中には恐ろしい奴があるものだ、感心をしていたところでございます」

「別に感心するほどの事ではないではないか」

成瀬九十郎は自若としておりますが、充分に好奇心を動かしている様子です。

「あれほどのお屋敷には嚴重な見張り見廻りもあります。表裏の門は門鑑がなければ、一寸も通すことではありません」

「待て待て次平、——お前は成瀬九十郎の弟子になって、忍術の

手ほどき位は習ったはずだ。見張りがあるとうと、門番があるとうと、そこを通るのは何でもない位のことは知って居るだろう」

「それは理窟で、——尾張様のお屋敷へ入るのは、そんな呑気なものじゃございません」

「忍術は知らぬ他国の敵の陣中へも忍び込む術を教えるのだ。泰平の御代の大名屋敷へ入るなどは物の数でもない」

「でも」

「お前は見張りがあると言ったが、見張りはあったところで、見張り同士ではとがめもしないだろう。門鑑もんかんというものがあると、言ったが、それは士分以下の者や、出入りの商人には入要でも、殿様が自分で通るのには門鑑は要るまい。他の大名方のお使者や、家中お歴々とても同じことだ」

「そう言えばそうですが、易々やすやすと御金蔵へ入るのは、係り役人の外には出来ない筈じゃございませんか」

平次も釣られるともなく言い募つものりました。

「その係り役人ならば、誰疑たれうたがうものもなく、自由に金蔵へ出入りが出来るだろう」

「――」

「すべて、物事に無理をしないのが忍術の極意だ。山脇玄内とか言う奴、何の巧たくみもなく、ぬくぬくと千両箱を二つまで盗み出したことであろう。相手は六十一万石の大々名だ、面白いではないか、次平」

成瀬九十郎はこんな事を言つて、カラカラと笑うのです。

「少しも面白くはございません。相手は六十一万石の大名でも、その日暮しの貧乏人でも、物を盗んで良いという理窟りくつはございま

せん」

「大層やかましい事を言うな、——だがな次平、その二千両を其日のものにも困っている、氣の毒な貧乏人にわけてやるとしたら、山脇玄内の罪も半分は軽くなるというものではないか」

「そいつを、あつしは大嫌いで。高利貸をして信心事に金を費うのも、泥棒を働いて施しほどこしをするのも、卑怯ひきょうな心持に变りはありません。そいつは皆んな、悪事を働いて極楽へ行きたいと言った、虫のいい人間のすることですよ」

「だが、山脇玄内はそんな氣じゃあるまい。人の出来ないような事をして、溜飲りゅういんを下げているのだらう。綱渡りをしてヤンヤと言われるように、——山脇玄内に見れば、泥棒もまた一つの芸事ではないかな」

「泥棒が、芸事？ 飛んでもない事ですよ、先生」

平次は以ての外に氣色ばみます。

「それが悪いのかな、次平」

「尾州の藏番奥宮鏡太郎とその配下の二人の役人が腹を切りかけていますよ」

「——」

「二千両の金が戻らなきや三人の命を助けようはありません。三人の武家が腹を切ればその親も子も配偶つれあいも、路頭に迷うことは判り切っております。これが増長慢心した泥棒風情の芸事のせいで済むでしょうか」

「——」

「貧ひんの盗みや出来心の盗みならともかく、これじゃ山脇玄内、盗った二千両に十倍の利子をつけて施しほどこしをしても、勘弁出来ない

じゃありませんか」

「なるほどな、——お前の言うのも尤もだ。その二千両が還りさえすりゃ、三人の者は腹を切らなくて済むだろう」

成瀬九十郎は妙な事を言い出しました。

「それはもう、二千両の金さえ無事に還れば、役人方が腹を切るまでもありません」

「それならワケはないじゃないか」

「へエ——」

平次は少しつままれそうでした。

「よく聴くがよい、次平」

「——」

「俺は居ながらにしてその二千両を捜し出してやろう——山脇玄内と雖ども鬼神ではあるまい、物の隙間や、節穴から入れるわけではないのだ、——多分、酉刻前後の門の閉まる前、出入りの一番混雑する時を狙って、家中の身分ある者と見せかけ、表門から威張り返って入ったことだろう」

「——」

「金蔵の入口は、たそがれ時、係り役人の後ろに物の影のようについて入ったに違いない。役人の後ろにヒタと附いて、向うの方、蔵の中から物音を聞かせるのだ。役人はその物音に心ひかれて、あたふたと入ったに違いない」

「——」

「山脇玄内は多分一と晩金蔵の中に泊って、幾万両とも知れぬ小判と一夜を明かした事だろう。翌る朝、係り役人が入って来て、千両箱二つ紛失したのに仰天しているとき、山脇玄内は誰はばか

らず金蔵を立出^いで、大手を振って表門から出たのだ」

「千両箱は？」

平次は釣られるように膝をすすめました。

「山脇玄内でも、二つの千両箱を両脇^{りょうわき}に抱えて、朝の表門をノコノコと出られる道理はない」

「――」

あまりの明察に、平次はあっけに取られて、この貧弱な忍術使いを見やるばかりです。

「後日折を見て取出すつもりで、屋敷の中に隠してあるよ。少し八卦^{はち}を置いて見ようか、――左様^{さよう}、――まず御金蔵のすぐ傍だ、土に縁があつて、石に縁があつて、水に縁があるかな。――お前は太急ぎで取って返し、三人の小役人を安心させるが宜い。腹を切ると痛いぞとな」

「先生」

平次はさすがに仰天しましたが、いま尾張屋敷から出て来たことまで言い当てられたのです。しかし最早^{もはや}ぐずぐずして居る時ではありません。挨拶もそこそこ、一気に屋敷へ取って返しました。今にも降り出しそうな村雨模様の空合です。

三

「二千両の行方^{ゆくえ}が判りました」

奥宮鏡太郎のお長屋へ通されると、銭形平次はいきなりこんな事を言うのです。

「何、二千両の行方？ 何処だ」

「お屋敷から持出された様子はございません。もういちど御金蔵のあたりをお調べ下さい」

「左様か」

奥宮鏡太郎、これも謹慎中の下役二人をつれて、あたふたと金蔵に駆け付けました。バラバラと一と村雨が来ましたが、もうそんな事などは考えても居ません。

「何処だ、平次」

「土に縁があつて、石に縁があつて、水に縁のあるところでございます」

「それだけでは解るまい」

「いえ、これで確かに判る筈でございます」

平次は不安がる役人を促して、金蔵の四方をグルリと廻りました。土に縁があり、石に縁があるというと、土台石の下などは最も恰好ですが、それでは水に縁がありません。

金蔵の南の方に用水井戸がありますが、井桁が栗材で、これは石に縁が無く、雨樋は水に縁があつても、銅ですから金に縁を生じます。

「何処だ、平次」

せき立てられて、平次はしばらく途方に暮れましたが、雨脚は次第に繁くなつて、平次も三人の役人もぐっしより濡れてしまいました。

「あッ、これだッ」

銅の雨樋から落ちた水が、御影で置んだ見事な暗渠の中にチョロチョロと落ちて行くのを見て、平次は思わず歓声を挙げたのです。濡れるのも構わず、泥の中に膝を突いて、暗渠に手を入れる

と、指先に触れたのは、固い箱が二つ、引出して見ると、紛れもないそれは千両箱です。

「――」

物をも言わずに飛付いた奥宮鏡太郎、千両箱を抱えるようにしたまま、用人の玉垣三郎兵衛を呼んで、四人立ち会の上蓋を払いました。

「あッ」

中は燦たる小判、何の紛れまぎもありません。

「有難い、平次殿。心ばかりの御礼も致し度たい、先ず拙者せつしゃ長屋へ――」

二つの千両箱を金蔵に納めると、奥宮鏡太郎は平次を誘さそいます。

「飛んでもない奥宮様、あれはあつしの働きじゃございません。あつしに教えてくれた人があるのです、――外ほかにも急ぎの用事があります。御免下さい」

平次は相手の引止めそうな様子を見ると、返事も聴かずにサッと引揚げました。

行く先は左内坂の成瀬九十郎の道場。

成瀬九十郎に逢って、どんな態度に出たものか、平次も全く思案が定まりません。思い切って縛ったものだろうか、相手の出ようを見たものだろうか、兇賊山脇玄内というのは、成瀬九十郎の変名に相違ないと睨みましたが、さすがの平次も、この忍術の師匠を縛るだけの証拠は一つも手に入らなかったのです。

「御免」

思い切って飛込むと、中は空っぽ。突き当りの障子一パイに、書きも書いたたり、淋漓りんりとした大文字が数行。

盗んだ金を身に着けるなら、成瀬九十郎こんな貧乏は
せぬ、盗賊を芸事と思う思わぬは其方の勝手だが、構
えて師弟の道を踏み違えまいぞ、穴賢。

山脇玄内こと 成瀬九十郎

門弟次平こと 銭形平次殿へ

「ウーム」

平次は思わず唸りました。あまりにも鮮やかな背負い投げです。

四

それから五六日は何事もなく過ぎました。

「親分、あの娘はちよいと踏めたね」

ガラッ八は思い出したように変なことを言います。

「どこの娘だ」

「へッ、通じないような顔をすることはないでしょう、——左内

坂のそれ」

「大泥棒の娘だよ、あれは」

「親が泥棒だって、娘は大丈夫で」

「馬鹿だなア」

「あの加奈とか言った娘に、もういちど逢いたいような気がしま
すよ。ちよいと淋しいが良い娘でしたね、夕顔の花のようで」

「夕顔の花と来たね」

「物の譬ですよ、親分」

「それほど執心しゅうしんなら、あの娘を捜さがしてくれ。娘を捜し出せば、親の隠れ家も解るというものだろう」

「やって見ましようか」

「江戸は広いぜ、八」

そんな馬鹿なことを言っている時でした。

「あの、お客様ですが」

平次の女房のお静が、片襷かただすきを外したまま、覗き加減に声をかけました。

「何処の方だい」

「名前は仰っしゃいません、若い、御武家風のお嬢さんで」

「丁寧に通すんだ」

平次はガラッ八と顔を見合えました。間もなくお静に案内されて来たのは、成瀬九十郎の娘お加奈——ガラッ八が夕顔の花に譬たとえた淋しい娘です。

「あッ、お前さんか」

素ッ頓狂とんきやうな声を出したのはガラッ八でした。

「親分、お願いがあつて参りました」

お加奈は部屋の隅の方に、慎つつましく手をつくのです。

「何うしてこの平次のところへ来る気になりました」

「父から教わりました」

「？」

「父は常々、江戸中で怖いのは、銭形平次たった一人と申して居りました」

「――」

平次は少し慄くすぐったく首を縮ちぢめました。

「その父を親分は疑うたぐっているに違いございませんが、父は正直一途の浪人者で、山脇玄内などと言う泥棒ではございません」

お加奈はピタリと言い切って顔を挙げるのです。

「その証拠は、お嬢さん」

「第一に、山脇玄内が尾州様、御金蔵に泊たつて二千両盗ったという晩、父はどこへも出ずに左内坂の宅たくに居りました」

「証拠は？」

「私が一緒におりました、これほど確たしかな証拠があるでしょうか」
これほど確かな証拠である代り、これほど不確かな証拠もありません。

「お気の毒だがお嬢さん、それは証拠になりませんよ」

「私が嘘を申すとしても――」

「飛んでもない、お嬢さんを嘘うそつきにして宜いものですか、――
あつしはそれを本當にしても、上お役人には通用しません」

親は子のために隠かくし、子は親のために隠す――と言った唐土もろこしの聖人の言葉を、平次は小耳に挟んでいたのです。

「どうしたら宜いでしょう、親分」

お加奈は詮せん方かたもない姿でした。

「本当の山脇玄内を捜し出して突き出すことですよ、外に工夫はありません」

「――」

お加奈かなは悲しそうでした。が、それ以上何にも言うことが無かったらしく、平次が突っ込んだ問いまで外らして、そこそこに帰ってしまいました。

その後ろ姿を見送って、ソツと八五郎に眼くばせすると、ガ



©2017 萩 柚月

ラッ八は少しあわて気味に、お加奈の後を追って、夕暮近い街に飛出します。

それから一刻ばかり。

「ひどい目に逢わされたぜ、親分」

ガラッ八は忿々^{ふんぶん}として帰って来ました。

「娘へちよっかいを出して、往来へ抛^{ほう}り出されたんじゃあるまいな」

「冗談じゃありませんよ、後をつける度毎^{たびごと}にやられた日にや、十手捕縄の手前も面目ねえ」

「それじゃ何うしたんだ」

「あの娘は後ろも見ずに歩くから、安心して跟^つけて行くと、いきなり神楽坂裏のしもたやへ入るじゃありませんか。占^しめたと思つて、しばらく経ってから入って見ると――」

「空家^{あきや}だろう」

「その通りで、正に一言もねエ」
ガラッ八は額^{てのひら}を掌で叩くのです。

「その家に、貸家札が貼ってあったのか」

「飛んでもない、貸家札なんかありや、あんな娘っ子の籠^{かご}抜けを逃^にしやしません」

「近所で訊いたかい」

「訊きましたよ。すると、近頃まで貸家だったが、塞^{ふさ}がったかも知れません。でも挨拶もないしお蕎^{そば}麦も来ないから、まだ引越して来たわけじゃないでしょう——という話で」

「それじゃ用意した細工だ、何だって突っ込んで訊いて見なかったんだ」

「へエ——」

「へエ——じゃないよ。籠^{かご}抜けだって、唯^{ただ}の空家へいきなり飛込めるものじゃねえ。その家の差^さ配^{はい}に訊いて、どんな人間が借りたか、いつ引越して来るか、よく確^{たしか}めて、突っ込むなり、張り込むなり、せめて三日も頑張^てって見るが宜^{てめえ}い。手前の好きな夕顔の娘が、きつともういちど姿を現^{あらわ}すに違^{ちが}えねえ」

平次の推理^{すいり}は整然^{せいぜん}としております。

「なるほどね、——だがね親分。夕顔の娘は、夕顔の花の間違^{ちが}いじゃありませんか」

「馬鹿野郎、夕顔で気に入らなきや、冬瓜^{とうがん}なり糸瓜^{へちま}なり、勝手なように融通して置きやがれ」

ガラッ八はまことに散々ですが、最後に一番取って置きの反抗^{くわだ}を企てました。

「それじゃ親分、下っ引を五六人狩り出して、山脇玄内を手捕りにしても構やしませんか」

「宜いとも、安心して手柄にするが宜い」

「今度は、きつとうまくやりますぜ、親分」

「念の入った御挨拶だ、——俺だつて遊んじやいないよ八」

二人はそんな事を言つて別れました。この上もなく仲の良い親分子分が、手柄を張り合うようになったのは、本当に珍しいことです。

五

その晩、山脇玄内は、神楽坂の質屋しちや、天城屋六兵衛あまぎやの家を襲いました。盗った金は千両箱が一つ、万事うまく行つて、イザ逃が出そうと言うとき、目ざとい主人六兵衛に騒ぎ出され、多勢の雇人が、金盥かなだらを叩いて急を告げたので、こんな時のために用意された町内の若者が数十名、天城屋の内外を始め、神楽坂の上下、蟻ありの這出る隙間すきまもなく固かためてしまいました。

泥棒は、どこへ行つたか、しばらくは影も形も現われませんでした。したが、包囲網を引締めて、最後に猫の子一匹隠れていないと判った時、ツイ先刻さつき、町内の若い者の一人のような顔をして、大手を振つて出て行つた者があることに気が付きました。

「あッ、あの野郎だ、——あれが泥棒だったんだ。天城屋の提灯ちようちんを持つて、自分の顔をわざわざ見せるようにして行つたぜ」

「妙にニヤニヤした野郎だが、誰だかちよつと思ひ出せない顔だと思つたよ」

そんな事を言ったところで、もう追いつくわけはありません。泥棒の逃げたのはそれでわかりましたが、盗られた千両箱は、泥棒が素手で逃げたにも拘らず、家の中にも、路地の外にも、何処にも見えなかったのです。

夜中から朝にかけて、大掃除おおそうじほどの騒ぎでした。天井裏も床下も、押入納戸、落しの中は言うまでもなく、井戸の中までも見ましたが、千両箱に似寄りのものもありません。

その翌る日の夕刻、フラリとやって来たのは銭形平次でした。

「あ、銭形の親分」

顔を知ってるのが声をかけると、千両箱を捜しあぐねた人たちは、地獄で仏と言った安堵あんどの顔になります。

「山脇玄内に千両箱をやられたそうだね」

「それですよ、親分、——持って出た様子はないのに、盗られた千両箱は、どこを捜しても見付からないのです」

天城屋六兵衛は萎しおれ切っておりました。

「俺にも判らないかも知れないが、ちよつと見せて貰いましょうかな」

平次は家の中を一通り見廻して、それから外へ出ました、わけても水瓶みずがめと下水と井戸に気をつけたのは、少しばかり訳のあることだったのです。

今日——未刻半頃やっはん、平次のところへ、手紙を一本抛ほうり込んだ者があつたのでした、披ひらいて見ると、

天城屋の千両は、水に縁があり、火に縁があり、空に縁がある

玄内

こう書いてあるのです。

平次はともかくも神楽坂まで飛んで来ました。別に自信があるわけではありませんが、この手紙の謎の文句から、何かしら金の隠し場所が判るような気がしたのです。

水に縁のある場所は一通り調べましたが、火に縁があると言
うと、銅壺どうこか鉄瓶てつびんの外はありません、その上、空に縁があると言
うと、全く想像を絶してしまいます。

「あ、解った」

平次は不意に声をあげました。

「何処で？ 親分」

「路地の足跡あしあとが深過ぎたし、庇ひさしの瓦かわらが一枚壊こわれている、——梯子はしごを」

平次の声に応じて、裏から梯子を持って来ました。それを踏んで大屋根の上に登った平次、天水桶てんすいおけを覗いて思わず歓声をあげたのです。

「あった」

水に縁があつて、火事のために用意して、常に大空を映うつす天水桶は、なるほど謎の言葉にピタリとするのでした。山脇玄内の手口を知っている平次は、思いも寄らぬ隠し場所を考えながら、少しの手がかりから、天水桶に眼をつけたのは手柄てがらです。

「山脇玄内は大物はきつと二度に盗む。今晚を過したら、この千両も手に戻らないところだったかも知れない」

平次がそう言うのは無理のないことでした。

「まずまず」

とお祝の用意をするのを、平次は振りもぎつて帰って来ました。こんな事で人に褒められたくはなかったのです。——泥棒の山脇

玄内から、謎の手紙を受取ったと言ったところで、誰がいったい本当にするものでしょう。

その翌る日ガラッ八は、鼻高々と平次の家へやって来ました。

「親分、解りましたよ」

「何が？」

「何が——は情けないな。成瀬九十郎、又の名山脇玄内と、その娘お加奈の住んでいる家ですよ」

「何処だ」

「あの空家のツイ裏」

「そんな事だろうと思ったよ」

「相変らず貧乏臭く暮しているから、あれが大泥棒とは、誰だつて気が付くめえ」

「それを気が付いたんだから、八五郎は大したものさ」

「からかっちゃいけません、——今晚手入れをして、一ぺんに縛ろうと思うがどんなものでしょう」

八五郎はもう、山脇玄内を生簀いけすの魚のように考えている様子です。

「それもよからうが、止した方が賢いかしこかも知れないぜ、八」

「なぜ、親分？」

八五郎の手柄などを嫉ねたみそうもない平次が、この手入れにはつきり反対するのは不思議なことでした。

「だって、こう言つて来てるぜ、——こいつはいつもの手紙と筆蹟ては違っているが、言うことは抜き差しのならねえ話だ。〓今夜山脇玄内は海真寺かいしんじ本堂を襲おそい、本尊弘法大師自刻じこくの坐像を盗み出す筈。これは玄内は大師の帰依者きえしやだが、海真寺の住職は戒律かいりつを保た

ず、だらくせんじょう墮落僭上の沙汰があるので、尊い本尊を預けて置けないからだ」と書いてある」

「へエ——、あれが大師の帰依者で？」

「とにかく、俺は海真寺へ行かなきゃなるまい。どうだ、一緒に行って見る気はないか、八」

「そいつは無理ですよ、親分」

「何が無理なんだ」

「今夜と言う今夜、八方から網を絞しぼって、山脇玄内を隠れ家から挙げることになって居るじゃありませんか」

「じゃ、勝手にするがよかろう」

「へエ——」

「その代り、山脇玄内を縛しばったら、牛込見附の番所へ来い」

「へエ——」

六

平次が海真寺へ行ったのは、もう酉刻過むつぎでした。

門前の花屋を覗いて、寺内をひと廻り、庫裡くらから本堂へ入って行くと、

「あ、銭形の親分さん、御苦労様で」

檀家総代、世話人、寺男の一隊が、住職から小僧を交まじえて、グルリと本尊の大師像を取囲み、怖々おずおずながら次第に深くなる夜を迎えているのでした。山脇玄内警告の一条は陽のあるうちに平次から寺へ通じて置いたのです。

本尊は等身大の坐像、黒々と時代の附いたのに、金欄きんらんの袈裟けさを

掛け、座布団の上に据えて、大厨子おおずしの中に納め、その前面は諸人の無遠慮な視線を避けるさために、錦にしきの几帳きちようで隠してあったのです。「ちよつと拝まして貰いましょうか」

ズカズカと本尊の前へ行く平次。

「あ、それはなりません。当寺の本尊は秘仏ひぶつになって、年に一度しか開帳しないことになっております」

住職はあわてて止めました。

「そんな事を言っただって、盗まれた日にや何にもなりませんよ」

「だが――」

住職の渋るしぶのも構わず、平次は、

「遠くからちよいと拝むだけですよ、――あつしはここに居るから、小僧さん、その几帳きちようをほんの少し開けて見せて下さい」

「――」

小坊主は住職の顔を眺めながら、強たって反対の様子のないのを見定めて、厨子の几帳を半分ほど開きました。

「もう沢山、――なるほど結構な大師様らしい。泥棒調伏ちようふくのために、うんと線香をあげて下さい、――線香よりは、抹香まっこうの方が宜いかも知れない」

平次はそんな事を言い捨てて、庫裡くらりの方へ行きましたが、やがて一と掴つかみの赤唐辛子あかとうがらしを貰って来て、それをよく揉んで、盛んに燃えている香炉こうろの中へパツと抛ほうりました。

「あッ、これはたまらぬ」

驚いたのはその座にいる十幾人の人たちでした。抹香まっこうと唐辛子とうがらしに燻くすべられて、咳せき込みながら逃げ出すと、それよりも驚いたのは、本尊の弘法大師様坐像でした。――いや弘法大師の坐像にな

りすましていた泥棒と言った方が宜いでしょう。続け様に咳き込みながら、

「何と言う事をするのだ」

厨子から飛出すと、戒壇かいだんと木魚もくぎよを踏んで、パツと外へ――。

「待て待て、山脇玄内」

続く銭形平次、ツ、ツツと前へ駆け抜けて、パツと両手を開いたなりに突っ立ちます。

「邪魔だッ」

「御用だぞッ」

「何をッ」

二人はパツと合って、もういちど左右に飛退きました。大師像に化けた曲者の手にはヒ首あいくちが、平次の手には十手が閃ひらめきます。

二度、三度、十手とヒ首が鳴りました。平次にぬかりは無かったにしても、この曲者は思いの外ほかの腕前です。

「灯あかりだ」

平次は十手を左に持ち替えながら怒鳴どなりました。相手は稀代きだいの忍術使いです。平次も一と通りの稽古をしたお蔭で、その術の発展だけは、巧たくみに妨さまたげましたが、何分薄暗い寺の庭で、いつ、どこへ姿を隠されるか解りません。

灯の来る前、曲者はもういちど平次に飛付きました。辛からくも左手の十手を働かせて、その襲撃を退けた平次、右手が高々と挙がると、得意の投げ銭が、闇を剪きって飛びます。

一つ、二つは避けましたが、三つ目に頬を打たれ、四つ目に唇を打たれ、五つ目に右手の指を打たれて、思わずヒ首あいくちを取落したところへ、

「御用だッ」

平次の体当り見事に極って、曲者は石畳の上に撞どと倒れました。

「それッ」

と折重おりかさなった弥次馬、一瞬の後銭形平次は、兇賊山脇玄内を、雁がん字がらめにして、埃ほこりを払っておりました。ちょうどその時、庭一パイに持出された灯で見ると、山脇玄内の顔は、小柄で皺しわだらけで、眼と口が大きくて、干大根ほしだいこんのようで、——成瀬九十郎そっくりです。

が、曲者は口を緘つぐんで物を言わず、平次もまたそれを聴こうともしません。

「本尊様はどこだ」

「どこへ持出した」

住職と檀家だんか総代は、今さらながら空っぽのお厨子ずしに気がつきませんでした。

「御本尊は寺内にあるに違いありません。それはこの曲者の手口です」

「寺内？ どこでしょう、親分」

「おいおい判るでしょう」

「どうしてお厨子の中なんかへ曲者は入っていたのでしょうか、親分」

いろいろの質問は八方から飛びます。

「薄明うすあかりるうちに御本尊を持出して、寺内に隠し、しばらく人目を誤魔化ごまかすために、自分で本尊になり済ましたのでしょうか」

「どこに持出したのでしょうか」

「搜して下さい」

それから半刻ばかり、寺の内外をのこる限なく捜したがわかりません。曲者はそれを冷やかに見て、一句も言わず、折があらば逃げ出そうとしている様子、平次は少しも目が離せなかったのです。

「とにかく、寺内にあるに違いない。気長に捜したら出て来るだろう」

平次は諦^{あき}らめて寺を立出でました。縄付を追って、門前まで来ると、花屋には灯が点いて、店番の老爺が、襦^{どてら}袍を着て頬^ほ冠^{かむ}りをしたまま、つくねんと坐っているのですが、その恰好が一刻^{とき}ばかり前に、平次がやって来たときと寸毫^{すんごう}の変りもありません。生きた人間が、そんなに長いあいだ、寸毫も形を崩^{くず}さずに、生温^{なまあた}かい秋の夜を、襦^{どてら}袍を着て居られるものでしょうか。

「あの老爺だ」

平次が指すと、二三人の人が飛付くといっしよでした。頬^ほ冠^{かむり}を取り、襦^{どてら}袍を剥ぐと、中から現われたのは、鑿^{のみ}の香も尊く、慈眼^{じがん}を垂れた大師の尊像ではありませんか。

「老爺をどこへやった」

続く不安はそれでした。

「物置の中で本当に眠っているよ」

曲^く者^{せもの}は始めて口を開きました。

「それから、もう一つ、その御本尊の胎^{たい}内^{ない}を見て下さい」

平次はたったそれだけの事を言って、曲者を追っ立てて牛込見附へ急ぎました。曲者が等身大の木像に執^{しゅ}着^{うちやく}するのは、何か理由があるのではないかと思ったのです。

果して、木像の中から金^{きん}無^む垢^くの大変な仏像が現われました。大

師入唐にゆうとうのとき、将来したのではあるまいかという——これは後の話——。

七

牛込見附の番所に来ると、ガラッ八は得々として迎えました。

「親分、首尾よく挙げましたよ」

「何？ 誰を挙げたんだ」

「山脇玄内親娘おやこですよ」

「馬鹿野郎」

「あッ、あれは、親分」

平次の後から下っ引が追いついて来た曲者を見ると、さすがにガラッ八の顔色が変わりました。

「山脇玄内はこの男だよ」

「すると、あれは？」

「成瀬なるせ九十郎さ」

「――」

ガラッ八の眼が飛出さないのが本当に不思議な位でした。

番所の中にはガラッ八と五六人の下っ引に縛られた成瀬九十郎が、娘のお加奈かなといっしょに、割り切れない顔で運命を待っておりしました。

「お、平次」

「いや、次平ですよ、——五郎八が飛んだ粗相そそうをしたそうで、まあ、勘弁して下さい」

平次はそう言いながら、お加奈と九十郎の縄を解いてやりします。

その時、平次の後ろから引立てられて来た曲者が、灯の中へ顔を出しました。

「お、兄上、到頭」

成瀬九十郎の口から出た言葉は、何も彼も説明してしまったのです。

「九十郎、俺を訴人したのは、お前だな」

山脇玄内の顔色がサツと変ると、激しい言葉が洩れました。

「いや違う、私ではない」

成瀬九十郎の、これが精いっぱい弁解です。

その間に、ポロポロと涙をこぼして居るのは、娘の加奈だけでした。その深刻な悲嘆の理由は、多分父も伯父も知らなかったでしょうが、平次だけは判然知っておりました。山脇玄内という兇賊を自分の伯父と知る由もないお加奈は、父に来た手紙を見て、——今夜海真寺を襲い、本尊を盗み出す——企のあることを覚えて、父を恐ろしい疑いから救うために、平次に密告の手紙を出したのです。

山脇玄内と成瀬九十郎は、それっきり引き離されました。淋しく家路をたどる親娘の後ろから、平次は追いつき加減に、

「成瀬先生、また参りますよ。忍術の稽古に」

こう声を掛けると、

「いや、もう忍術指南は止しじや」

成瀬九十郎は振り返りもせずに応えて、月のない神楽坂を登って行くのです。

×

×

「親分、あっしには少しも解らねえ、あれは一体どうしたことな

んで？」

縄付を引渡した帰り、ガラッ八は平次に絵解きをせがみました。「俺も解らなかったよ、——だが、成瀬九十郎という人間の**人柄**ひとがらと、娘の人柄にどうも悪人らしくないところがあると思ったんだ。最初は成瀬という人を、山脇玄内と思い込んだのはお前と同じことさ」

「へエ——」

「岡っ引は証拠そくを揃そろえることも大事だが、人間を見ることも大事だよ。——あの成瀬という人は、兄の山脇玄内のやり口をよく知って居たんだ。同じ霞流忍術かすみりゆうの達人で、兄弟だもの、それは無理のないことさ。尾州の二千両、天城屋あまぎやの千両、皆兄に罪を犯おかさせたくないから、俺に教えて捜し出させたんだ」

「へエ——、それほど賢い人間が、何だって忍術指南の看板などを出して、上役人の目に止まるような事をしたんでしょ」

ガラッ八の疑問はなかなか突っ込みます。

「それが解らないばかりに苦労したよ、——笹野の旦那のお言葉添ぞえで、甲賀町の忍術者のところへ行つて聴くと、霞流の忍術というのは大変珍しいもので、天下にこの流儀を伝える者は山脇大膳という人の門人二三人しか無いと言うことが解ったんだ」

「——」

「成瀬なるせという人が、霞流忍術指南という看板かんばんを出したのは、江戸中の噂にして、仲間の者を呼ぶためだと見当をつけたが、後で考えると、これは兄の山脇玄内を呼ぶための苦しい計略けいりやくだったんだ、——兄の山脇玄内が、泥棒になつて江戸中を荒らしている。それは捨て置けないから、何とかして兄を呼び寄せて意見をし、本心

に還^{かえ}らせるつもりのところへ、俺とお前が入門したんだ」

「へエ——」

「向うは平次に八五郎と知って入門させた。それからはお前の知っての通りさ、——多分、左内坂を引払う頃、願^{かな}いが叶^{かな}って兄に廻り逢ったことだろうが、玄内は弟の意見など聴き入れなかった」
「なるほどね」

「娘のお加奈が——今晚は海真寺の本尊を盗むつもり、放埒^{ほうらつ}な住職をこらしめるためだ——とか何とか書いた玄内の手紙を見て、それが真^{まこと}の伯父とも知らずに俺に教えたのだろう」

「お加奈は泣いていましたぜ、可哀想に」

「俺は唯^{ただ}泣かせた丈^だけだが、お前は縛^{あき}ったじゃないか。いずれにしても夕顔の花とは縁がないよ、諦^{あきら}めるが宜い」

「へッ、有難い仕合せさ」

ガラッ八はペロリと舌を出しました。調子は道化^{どうけ}ておりますが、顔に漂^{まっ}う一抹の哀愁^{おほ}は覆^{おほ}うべくもありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五月初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>